

情報公害シンポジウム*

一 松 信**

1. 標記のシンポジウムが、1971年7月8日(木)から10日(土)まで、箱根の彫刻の森ホテルで開催された。参加者は約25名で、本学会員のほか、法務省・通産省などの関連官庁から、とくにお願いして参加していただいた方もあった。参加者は比較的小人数に限定されていたが、きわめて活発な討論がかわされた。この会でのべられたおもしろそうな話題は、「デンサンキ シンヨウバカリデキナイ」という見出しで、7月12日の朝日新聞朝刊に掲載されたから、ごらんになった方も多いと思う。いずれ報告集を刊行する予定である。ただし問題が問題だけに、印刷物には公表しかなる部分もありうることを、お許し願いたい。

2. 「情報公害」という語は、「JIS 情報処理用語解説」¹⁾によると、

情報、情報化、情報処理などによる環境汚染、1971年の流行語、

という適切な解説がでている。たしかにこの語は一種の流行語であり、現在のところ「天下の憂に先んじて憂うる」話である。しかしこの種のシンポジウムの重要性が、1970年秋ごろからささやかれ、1971年1月のプログラミング・シンポジウムにおいては自由討論のテーマの一つにとりあげられた。そして夏の(「夢の」)シンポジウムの話題の一つとして正式にとりあげられ、東大(大型計算機センター)石田晴久氏と筆者が世話人として計画した次第である。

3. まず第1日目(午後の夜)には、山内二郎教授のあいさつのほか、下記の講演が行なわれた。

中野範長(法務省) 情報の法的保護をとりまく諸問題

高橋 理(東北大大型センター) 情報産業メーカーの公的性格とユーザーの立場

高橋達郎(科学技術情報センター) 情報の量の増大と、公害およびその計算機との関係

国井利泰(東大理) 情報洪水による情報公害とその対策

安井 裕(阪大工) Computer Utility の普及強

化に伴う二、三の問題点について

東 基衛(日本電気) 情報公害、そのフレームワーク設定の試みと問題提起

この日のねらいは、まず「情報公害」の定義であるが、一般向きの実例は、むしろ2日目の「情報犯罪」の部で語られた。「公害」については、数名の方々から、多少のニュアンスの差はあったが、「犯意にもとづかず利益追求などの特定の目的の副作用として、不特定多数の者が被害を受け、しかもその加害者が見不明確に見える害現象」という定義があげられた。情報関係でとくに問題になるのは、個人情報の大規模なデータベースの悪用および誤りによる被害であろう。

この会はもともとやかましく時間を限らず、自由に討論する趣旨であったが、冒頭から大議論になり、講演を夜まで延長する次第になった。

中野氏の話は、全体の概論であったが、とくにソフトウェアの法的保護に重点をおかれた。討論の折に、安田寿明氏(東京電機大学)から、草加次郎の疑をかけられて、警察でしぼられた体験談など、興味深い話が披露された。高橋(理)氏は、計算センターの立場を訴え、高橋(達)氏は、計算機公害を論じた。もっとも「原情報はすべて単品で同一物はない」という同氏の前提には、異論があった。国井氏は、バンク寸前のChemical Abstracts Serviceの現状をのべ、安井氏は、相異なる機種を共通なメモリーバンクでつなぐ大システムの問題点を論じ、東氏は、公害論の分析のあと、産業技術、科学技術、人間の権利の3次元図をフレームワークとして提案された。

4. 第2日目の午前には、教育、著作権問題を中心として、下記の講演が行なわれた。

一松 信(京大数理研) 高校での計算機教育に対する危惧

西田 稔(京大大型センター) ユーザーのプログラムの質の問題

向井 保(通産省、情報管理課) ソフトウェア法的保護調査委員会の趣旨と経過

このほか戸川隼人(京都産業大) 人間・機械系の弱点が予定されていたが、同氏の急病で取り消しとなった。

* Symposium on the "information pollution", by Sin Hitotumatu (Research Inst for Math Sci., Kyoto Univ.)

** 京大数学理解析研究所

最後にあげられた委員会は目下審議中であり、今年末には答申がでる予定である。ソフトウェアは、現行の特許権にも著作権にもりにくく、その保護のためには、なんらかの新しい法的規制が必要のような印象をうけた。

5. 第2日目の午後は、計算機犯罪を中心として、下記の講演が行なわれた。

石田晴久(東大大型センター) コンピューター犯罪

西村恕彦(電総研) 情報処理の被害者の立場から
中川一郎(京大理) 大型計算機センター運営上の問題点

この部分にもっともおもしろい話題が多かったが、すでにいくつかの記事²⁾⁴⁾に紹介されているので、ここでは省略する。ロビーでの会話では、銀行のオンラインシステムとにかくミスが多いのは、何も知らない銀行がメーカーの売りこみにひっかかったのか、それとも少々の誤りによる損害よりも、省力化のメリットを大きく考えたのか、といった疑念もささやかれた。また大学の計算センターを、研究用だけでなく、教育用にも使用できるようにすることは、公害問題とは無関係に、緊急の課題であることを感じた。

6. 2日目の夜には予定をくりあげて、保護技術をとらあげた。

高橋延匡(口立中研) プロテクション技術について(5020 TSS を例として)

竹下 享(IBM) Monitor の保護について

この講演の途中に、2度停電があり、計算機は停電に弱い、ということをおぼろげに思いらされた。高橋(延)氏はさらに、「ジョーという名のロジック」⁵⁾という、書かれたのは古いが興味深いSFの紹介もされた。また一般市民の法的保護として、なんらかの形の「三権分立」ができることが大事である、ということも強調された。

7. 最後の日(午前のみ)は、まったくの自由討論とした。大槻説乎氏(九大中央計数施設)による総括では、とくに研究者の公害に対する責任とその自覚が強調された。また報道関係者の立場から、平松齊氏(朝日新聞)の感想がのべられた。その他いくつかの話があったが、とくに前もって手紙でよせられた提案のうちから、情報戦争のハーグ条約(毒ガス禁止のような、なんらかの国際的規制の提案)、計算機関係者のモラル(道徳というよりむしろ士気、生産意欲)、それと関連して計算センターの人事管理や省力化が論ぜられ

た。この面では、アメリカよりも日本の方が事態は深刻のようであり、意外に早くTSSによる無人計算センターが実現するかもしれない。また都会から田舎へ移転した会社の業績が低下した例も語られ、都会の過密化が、きわめて複雑な問題であることを再認識させられた。

8. はじめにのべたとおり「情報公害」というのは、一種の流行語であり、それに対する像はかなりまちまちである。この会でも話は、しばしばそこから逸脱した。しかし、出身も現在の立場もきわめて多様なこれだけの参加者が、きわめてなごやかに討論しあい、話はずんで、一応主要な問題点は出たように思われるのは、あるいは当然のことかもしれないが、まことに幸いであった。細かい点では意見の差はあったが、公害は技術よりも、多分に政治の問題であることや、個人の良心をこえた独特の「企業の論理」が問題の核心であることは、全員の共通の基盤になって討論されていたようである。

情報公害は、現在のところ、まだそれほど切実な問題とは感ぜられていないようである。しかし公害というものは、いつでも先駆者の警告はかえりみられず、静かに深く事態がひろまり、ておくれになってから、はじめて騒ぎだされるものである。たとえば、国民背番号制で象徴される個人情報の蒐集と集中管理の危険は、いくら強調しても、しすぎるということはないと信ずる。情報公害に関しては、とくに本学会員のわれわれは、一方では被害者たりうるとともに、故意にせよ、無意識にせよ、加害者ないしはその共犯者となる危険性が大きい立場にある。そのことをむやみとおそれることはないが、そのような自覚をもつことが必要であろう。いささかお説教じみたが、この会が1回だけで終わるのではなく、絶え間ない一種の市民運動として、今後も続いてゆくことを期待して、つたない報告を終わりたい。

参考文献

- 1) 西村恕彦編：共立出版，1971，6月。
- 2) 石田晴久：蟻塔，共立出版，1971年3月号。
- 3) 石田晴久：コンピューター犯罪について，法律のひろば，1971年6月号。
- 4) コンピューター犯罪の手口(座談会)，bit，共立出版，1971年7月号，57-64(詳しい文献表がある)。
- 5) SFカーニバル，創元推理文庫，1964に所載，

(昭和46年7月26日)